

「保育」とは何か

—「生きる力」をはぐくむ視点を大切にした保育環境—

分科会名 2 6 安全で豊かな園舎・保育環境づくり

京都府 松村正希

福井県 福井大学大学院工学研究科 博士後期課程 栗原知子

きたの保育園は、1～5歳児混合の縦割り保育（きょうだい保育）を、居間・ダイニングキッチン・寝室を有する「いえ」型の保育空間で行う全国初の保育園である。保育室には食事作りのできるハード環境を整えてあるにも関わらず、経済的事情からその利用が困難であったが、新たに調理員を雇用し（H22年1月から6ヶ月間）、保育室内での調理員常駐実験を行うこととした。

はじめに

「保育とは何か」もう一度考えてみませんか？

保育現場では「気になる子ども」が増えていると言われています。発達上のアンバランスはなくても、食べる、寝るといった生活の力（生きる力）そのものに弱さを持っている子どもたちが増えており、生きる力に弱さのある子どもたちは、食べる、寝る、笑うなど、基本的なところに問題となる症状が出るといわれています。

乳幼児にとっての保育施設は、単なる通所施設（一時的に身を預ける施設）でなく、「命」＝「生活そのもの」をあずける「居住施設」であると位置づけている。よって、きたの保育園の設計コンセプトは「生きるちからを育む」場所である。

では、子どもの「生活」とはなにか。「生」とは、食・衣・排泄・眠る・遊び等々であり、「活」とは、社会的活動・コミュニケーション・役割等々が挙げられるが、この「生活」の意味を深く検証されたことがあるでしょうか。心理学者であるマズローの法則（①生理的欲求→②安全の欲求→③社会的欲求→④自我の欲求→⑤自己実現の欲求）に定義されている最も基本的な欲求、「生理的欲求」＝食欲・性欲（スキンシップ）が保障されているでしょうか。「生きるちからを育む」環境で大切な・誰しもがひとり一人持っている裸の命を守ることができているでしょうか。子どもの人権を守ることのできる保育環境とはどのようなものでしょうか。子どもが年齢や発達度に応じて自分の意思を持ち、‘人として生きるちからを育む’環境でしょうか。安心できる保育環境でしょうか。

行動観察調査にみる子どもと職員の生活変化について—保育室内での調理員常駐実験を通して—

—空間利用の変化—

実験前、子どもたちが台所・食堂を利用する時間帯は、昼食・おやつ時間や午前中の制作活動時がほとんどであったが、実験開始から以下の順に子どもの動線に変化がみられた。

- ①外遊びから戻って台所に顔を出す子どもが増える
- ②匂いにつられて台所に入り、調理員と会話をする子どもが増える
- ③調理前の食材を観察したり、調理の様子をみる子どもが増える
- ④味見や手伝いが増えることによって、台所での滞在時間が増える

—調理員と子どもの関わり—

実験前から約1年半の間、調理員が昼食時に保育室内で配膳を行っていたこともあり、子どもたちの実験への反応は意外とスムーズであった。調理員常駐による保育への悪影響や混乱は全くなく、むしろ“常に誰かが台所にいてくれる”安心感が、子どもだけでなく保育士たちにも感じられるようであった。調理員についても、子どもひとり一人の朝からの様子が把握できる事で食事の量を調節したり、子どもたちの遊びや活動に合わせたメニューアレンジができたりと臨機応変に調理工夫ができる点で満足感や一体感がうまれていた。また、実験開始直後は、居間・寝室へ顔を覗かせる程度であった行動範囲も、3月時点では居間・寝室へ自由に入出入りし活動や遊びに参加する調理員の姿がみられるようになった。

調理員と関わりをもつ子どもの年齢については、概ね3歳児⇒4歳児⇒2歳児⇒1歳児の順で増えていき、年齢が下になればなるほど関わる時間や密度が濃く、特に外遊びへの参加が難しい子どもや園に慣れない1歳児は午前中のほとんどを台所で過ごしていた。

—調理員の日誌・報告から—

実験開始から「匂い⇒味見⇒手伝い」という流れで関わりができてきた。最初は大人からの発信が多かったが、日がたつにつれて子どもから子どもへの発信へと変わっていった。特に年齢の大きい子から始まり、最近では2歳児でも伝えあいがみられる。子ども同士のやりとりは「給食先生に〇〇もらった」という報告が多かったが、そのうち“今日は何を作る？”という興味に変わり、「あれは〇〇という野菜だ」とか「これはおうちでみたことある！」という会話になっていった。

また、今までよりも職員同士の会話も増えたように思う。子どもの様子や活動の内容など話題は様々だが、「先生、かつおのいい匂いしてるわぁ」とか「この部屋なんかあったかいね」という言葉ももらうようになった。キッチンでの調理は子どもだけでなく大人にとってもほっとできる雰囲気を作っているのではないかと感じた。

さいごに —「食事」＝「生きる力」を直に提供してくれる調理員の存在とは—

常にやさしく対応してくれる調理員は、子どもたちにとって家庭でいう祖父母のようなもので、普段、保育士やお兄さんお姉さんをお願いできない事をお願いして甘える事が出来るあたたかい存在である。また、常に台所を明るく保ち、温かい食事を準備している調理員は、子どもだけでなく保育士にとっても気持ちの切り替えの場や「ほっ」と一息つかせてくれる大切な存在である。「いえ」型の保育空間が、調理員常駐というソフトの改善によって、より「いえ」らしい家庭的な雰囲気になったように思う。常に見守ってくれる人がいる、生きる力を与えてくれる・食事を提供してくれる存在がそばにいることの大切さに気付かされたように思う。この、生活にとって当たり前の風景が、近年、保育施設から消え去ろうとしている。もう一度、「保育とは何か」私たち大人が真剣に考え直す時期がきているのではないだろうか。